

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02559

研究課題名(和文) モダニズムと<非白人>文化の相互交渉 ウィンダム・ルイスとヘミングウェイを中心に

研究課題名(英文) Interaction of Modernism and "Non-white" Cultures

研究代表者

中村 亨 (Nakamura, Toru)

中央大学・商学部・教授

研究者番号：70328029

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：シャーウッド・アンダソン、ジーン・トゥーマー、アーネスト・ヘミングウェイという三者の関係と、アフリカ系作家の台頭を白人への脅威と捉えるウィンダム・ルイスとアンダソン、ヘミングウェイとの関係、そしてエズラ・パウンドと日本人芸術家たちとの関係を軸に、白人による英語圏モダニズム文学と非西洋世界の伝統を継ぐ同時代の表現者たちとの相互交渉を探った。

英国の文化的伝統から独立した多文化主義的な理想に基づくアメリカ文学を生み出そうとする動きと人種間の文化的分離を目指す作家たちの動きの衝突と離反、黒人を白人が模倣する minstrel・ショーの伝統の転用といったモダンな文化創造のダイナミズムの一端が分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカ文学においては、伝統的にアフリカ系作家の文学と白人の文学は伝統的に別個の切り離された領域として研究され、両者の関連についての研究は乏しかった。1990年代から両者の関連を探求する著作が増えてきたが、それでも全貌の解明からは未だほど遠く、特にヘミングウェイとウィンダム・ルイスに関しては白人以外の芸術家や表現者との関わりはほとんど論じられていない。

本研究はその未開拓の地平の一端に光を当てるものである。

研究成果の概要(英文)：The research clarified how great impact Jean Toomer's Cane gave to Sherwood Anderson and how that impact is registered in Anderson's novel Dark Laughter. Moreover, how Hemingway and Wyndham Lewis was overwhelmed by Anderson's bewilderment, which was caused by his reading of Cane, was explored in the research.

To add to that, the reaction of Hemingway and that of Lewis to Harlem Renaissance, the effect of some African-descent artists on Hemingway's works, and interaction between Ezra Pound and Japanese artists are considered.

研究分野：英語圏文学

キーワード：Modernism

1. 研究開始当初の背景

この20年間の間に発展を遂げてきたニュー・モダニスト・スタディーズにおいて、それ以前は一握りの白人エリート作家たちによる難解で高尚な文学だと思われてきたモダニズムの研究範囲は飛躍的に拡大した。ダグラス・マオが2008年に発表した論考“The New Modernist Studies”で述べているように、ニュー・モダニスト・スタディーズは研究対象となるモダニズムの範囲を三つの方向、すなわち歴史上の長さという時間的方向、国際的の広がりという空間的方向、さらに高尚な芸術とされてきたものと大衆文化とをつなぐ垂直方向において拡張することを目指している。

この三つの方向のうち国際的の広がりに関しては、欧米にそれまではもっぱら集中していた研究者の関心が、ラテンアメリカやアジアといった非西欧世界におけるモダンな文学や芸術にも向けられるようになってきている。また欧米の作家や芸術家たちがジャズのようなアフリカに一つの源泉を持つ新たな音楽にいかにか触発されたかといった事柄についても検討が進んでいる。

とはいえその一方で、モダニストと見なされている英米の白人作家たちが、西欧以外に出自を持つ作家や表現者たちによる新たな芸術創造の動きにどう呼応し、両者の間にどのような相互交渉があったのかということについては、研究者による実証的な研究・探求が進められているとは言いがたい状況であった。

2. 研究の目的

エズラ・パウンドとともにイギリスでヴォーティシズムを創始したウィンダム・ルイスと、ニューヨークのハーレムを中心にアフリカ系の作家たちが担った新たな文芸運動ハーレム・ルネッサンス、ハーレム・ルネッサンスの旗手ジーン・トゥーマーが創作の手本としたシャーウッド・アンダソンおよび彼と多文化主義的な理想を共有した著作家たち、そしてパウンドおよびヴォーティシズムに感化される一方アンダソンに師事した作家ヘミングウェイ。その四者の間で繰り広げられた相互交渉を探る。

3. 研究の方法

構造主義以降の文学研究や比較文学の流れを受け、ニュー・モダニスト・スタディーズに携わる研究者であれそれ以外の研究者であれ、作家や作品間の接触や影響についての実証的な検証を欠いた複数テキストの比較研究が今日では多く見受けられる。だがそうした恣意的とも言える比較とは異なり、本研究は研究の手法としては、今では古典的ともいえる地道な実証を踏まえた関係性の検証へと立ち返り、作家の出版された作品だけではなく、手紙、雑誌記事、そして関連する同時代の著作家たちの発言や著述といった一次資料の調査、そして作家の草稿にも目を向けて検証を進める。

4. 研究成果

- (1) アンダソンとハーレム・ルネッサンスへの、ウィンダム・ルイスの反応と、アンダソンのハーレム・ルネッサンスに対する関係、そしてルイスのアンダソンへの反発とは裏腹な二人の類似性

アンダソンの黒人文化への傾倒、そしてハーレム・ルネッサンスを筆頭とするアフリカ系作家の台頭をルイスは白人衰退の兆候そして白人全般への脅威として否定的に捉えている。そして白人の衰退とりわけ士気の低下を防ぐために、白人と非白人との文化的分離を強く訴えている。

対照的にアンダソンは、英国の文化的支配から独立した多文化主義的な理想に基づく新たなアメリカ文学の創出に、ハーレム・ルネッサンスの著作家たちと同じく共鳴し、ハーレム・ルネッサンスの旗手ジーン・トゥーマーの作家デビューを後押しした。だがその一方でアンダソンは、トゥーマーの『砂糖きび』が暴露するアメリカにおける人種差別の禍々しさを直視することができず、また『砂糖きび』から読み取れるトゥーマーそして黒人達の白人への鬱積したルサンチマンに当惑せずにはいられなかった。その結果アンダソンは、『砂糖きび』に触発された作中で多文化主義的な理念を称揚する『暗い笑い』を出版した後は、トゥーマーともハーレム・ルネッサンス全般とも距離を置くようになった。そうした彼の姿勢は、黒人を好きだからといってそばに居て欲しいとは思わない、という趣旨の発言を言い放っている雑誌記事に典型的に現れている。最終的には黒人作家たちと一線を画し距離を取ろうとしたという点では、アンダソンとルイスは表面上の対照性にもかかわらず根底では共通していることを検証した。

(2) エズラ・パウンドによるヴォーティシズムの美学と、俳句の受容をめぐる野口米次郎との競合

パウンドはヴォーティシズムの美学を、ウィングダム・ルイスが発刊した彼らの芸術運動の機関誌『プラスト』において言明する記事を発表しており、その記事では日本の俳句を範とする単純性の美が称揚されている。パウンドの俳句称揚に先立ち、野口は英国読者に対し、多くの言葉を弄する当時の因習的な英詩を批判し俳句の優越性を説いていたが、パウンドの俳句称揚と俳句に触発された彼の美学は、野口の俳句受容との違いを強調したものであり、野口への対抗意識を下敷きに形成されたものであると考えられることを論じた。すなわち、俳句を日本人の独特な美意識の発露であることを力説する野口とは対照的に、パウンドは自らの追求する単純性の美が、個別性や具体性から離れた抽象的な数式の如きものであることを主張し、特定の地域文化を超越したものであることを訴えている。またフランス象徴派の詩との類似を訴えて芭蕉の俳句を礼賛する野口とは異なり、パウンドの『プラスト』での美的宣言ではフランス象徴派への批判的姿勢が鮮明に打ち出されている。

俳句礼賛を野口が行ったオックスフォード大学での講演とその講演へのパウンドの反応も踏まえ、二人の関係を検証した。

(3) ヘミングウェイの、アンダソンが属する文学グループからの離反と、トゥーマーおよびハーレム・ルネッサンスから離れる方向の選択

ヘミングウェイは作家として創作を始める出発点においては、トゥーマーと同じく、アンダソンおよびアンダソンが属する英国文化から独立した多文化主義的なアメリカ文学創出を目指す文学グループの思想から強い影響を受け、そのグループに属していたとすら言える。だがアンダソンからの文学的影響を否定する発言をし始めるのと時を同じくして、ヘミングウェイは多文化主義的なアメリカ文学を目指す文学グループの作家たちを公然と批判し始め、自らとの違いを強調し始める。具体的には、批評家H・L・メンケン、ユダヤ系作家ウォルド・フランク、そして『日はまた昇る』に登場する作中人物ロバート・コーンのモデルでユダヤ系作家のハロルド・ローブとローブの文学的企てを激しく攻撃しているのである。その攻撃は文芸誌に掲載された詩、アンダソンを主な標的とするパロディ小説『春の奔流』、そして小説『日はまた昇る』において立て続けに行われている。

フランクはトゥーマーの処女作『砂糖きび』創作の助言者でありその出版に尽力したトゥーマーの最大の協力者であり、ローブはフランクに共鳴し『砂糖きび』に収録される主要な作品を自分が創刊した文芸誌『ブルーム』に掲載することで、トゥーマーを支援していた。またメンケンは彼が主宰する雑誌の書評でハーレム・ルネッサンスの作家たちの台頭を歓迎し支持していた。そのフランク、『ブルーム』とメンケンへヘミングウェイは詩の中で名指し「たわごと」と切り捨て、また『春の奔流』と『日はまた昇る』でメンケンとローブがモデルのコーンを嘲笑の対象とすることで、多文化主義的なアメリカ文学の創造を目指しアフリカ系作家たちの台頭を後押ししようとする陣営への敵対的姿勢を鮮明にしたのである。そのヘミングウェイの敵対姿勢が結果的には、トゥーマーおよびハーレム・ルネッサンス全般と距離を置くことにもつながっていたことを検証した。

(4) アンダソン『暗い笑い』がヘミングウェイに与えた衝撃

これまで概して『暗い笑い』は失敗作と見なされ、ヘミングウェイによるそのパロディ小説『春の奔流』は『暗い笑い』に典型的に見られるアンダソンのセンチメンタルなプリミティヴィズムを適切に揶揄した作品だと考えられてきた。そうした通説とは異なり、ジーン・トゥーマーを筆頭とするアフリカ系の著作に接したアンダソンの戸惑いと白人としての不安が表現されている『暗い笑い』を、ヘミングウェイが読んで受けた衝撃と動揺が『春の奔流』に刻印されていることを検証した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中村亨	4. 巻 24
2. 論文標題 『エスカイア』におけるヘミングウェイの演技と抵抗、ミストレル・ショーの転用	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヘミングウェイ研究	6. 最初と最後の頁 1 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Toru NAKAMURA
2. 発表標題 Ezra Pound and Japanese Artists
3. 学会等名 Research Seminar, Brookes University (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toru Nakamura
2. 発表標題 A Farewell to Arms: New Interpretations “The Mask of a Manly White: Self-Restraint, Execution, and A Farewell to Arms”
3. 学会等名 Hemingway Conference 2018: Hemingway in Paris (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村亨
2. 発表標題 The Torrents of Spring における女兒置き去りの逸話と、文壇におけるヘミングウェイの位置取りについて
3. 学会等名 日本ヘミングウェイ協会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toru Nakamura
2. 発表標題 Americans as a Mirror Image: "Ernest Hemingway, The 'Dumb Ox'" and "A Soldier of Humor"
3. 学会等名 Lewis Conference 2017 'Benign Fiesta: Wyndham Lewis's Texts, Contexts, and Aesthetics' (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 日本ヘミングウェイ協会編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 351
3. 書名 ヘミングウェイ批評 新世紀の羅針盤	

1. 著者名 マイケル・ノース著 中村亨訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 450
3. 書名 1922年を読む	

1. 著者名 Editor: Paul Heron Author: Yuko Yaguchi, Shigeru Kashima, Toru Nakamura, and others	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Sky Blue Press	5. 総ページ数 204
3. 書名 Critical Analysis of Anais Nin in Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------